



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〜第二二二号〜

啓蟄 けいちつ

三月五日

## 啓蟄と「驚蟄」

弥生三月、「春めく」季節になりました。

二十四節気は、土中に冬ごもりしていた虫が地上にはい出る啓蟄を迎えます。この季節の言葉は、七十二候の「蟄中啓戸」（すごもりの虫、戸をひらく）に由来しています。七十二候は、二十四節気をさらに三つに細分化したものです。一年には四季、二十四節気、七十二候があります。

啓蟄の土著けて蟻闘えり

鷹羽狩行

小さな虫の生命力を詠んでいます。「蛇穴を出づ」「地虫穴を出づ」という季語もあり、さまざまな生き物が活発に動き始める頃といえるでしょう。

二十四節気はもともと中国で考えられましたが、あちらでは啓蟄ではなく、「驚蟄」と書くことを知りました。なぜなら、古代中国の景帝（紀元前一五六〜一四一在位）の諱を避けたからだとか。前漢第六代目の皇帝である景帝は、国の集権化を進めた権力者で、『三国志』の登場人物、劉備はこの景帝の末裔を名乗っていました。景帝の諱（生前は呼ぶのをはばかった実名）は劉啓です。この啓を避けて「驚蟄」と改められたのです。その後、漢王朝が減じると元に戻されるのですが、使いなれた「驚蟄」は残ります。二十四節気を覚えるために節気を全部読み込んだ中国の詩にも、「驚」が使われています。

春雨驚春清穀天（立春・雨水・驚蟄・春分・清明・穀雨）  
夏滿芒夏暑相連（立夏・小滿・芒種・夏至・小暑・大暑）  
秋処露秋寒霜降（立秋・処暑・白露・秋分・寒露・霜降）  
冬雪雪冬小大寒（立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒）

日本には奈良時代の文武天皇の頃に使った暦が啓蟄であったため、本来の「啓蟄」という言葉が残っているのです。紀元前、中国にすでにあった季節の言葉。その紆余曲折にもまた驚かずにはいられません。

文 千種清美

